3　大中の湖の干拓と開拓

○大中の湖における開拓

◆干拓への時代の要請

内湖の干拓計画

内湖とは、琵琶湖と砂州などで切り離されているが、隣接しながら水路でつながっている水域のことで、かつては琵琶湖の周辺に大小40あまりの内湖がありました。内湖は水深が2m以下と浅く、大正期から干拓地の適地とされてきましたが、かんがいの貯水池や田畑の肥料採集地、漁場などに利用されていたため、干拓反対の意見が強く、干拓の実現に至ることはありませんでした。

第二次世界大戦の進展とともに戦時食料増産対策が強く要求されるようになりました。当時、内湖の水位低下により、内湖の漁場としての地位が低下する中、県内10数ヵ所の内湖の干拓が計画され、順次工事が進められるようになりました。

▲大中の湖の干拓
［所蔵：安土城考古博物館］

大中の湖の干拓

県下最大の面積を誇る大中の湖は、戦時中から干拓が計画されていましたが、戦後の漁場補償交渉が長引き、着工は昭和32年となりました。時代の要求は、食糧増産から農業近代化へと移っており、新たなモデル地区づくりとして1,145haが干拓されることとなりました。

締切堤防、排水機場などの設置工事と地区内の排水が進み、昭和39年に干陸化され、昭和41年より合計216戸が入植しました。

◆開拓者の苦労と成功

開拓地への入植

入植者には1戸あたり4haの農地が割り当てられました。しかし、区画によっては、腰までつかっての田植え作業を強いられる軟弱地盤もあり、大半の入植者にとって苦難の連続となったようです。開拓者の当時の苦労を綴った手記を、次のページに転載します。

入植者は減反政策の克服のために稲作からの転換を図りながら、しだいに野菜、畜産を含めた選択的複合経営に乗り出し、新しい経営によって、農家所得は10年間で4倍になりました。特に近江大中牛や大中スイカは、ブランド農産物として人気を集めていきました。

▲大中牛［『能登川の歴史』より転載］

▲大中の湖 西瓜初荷［提供：滋賀県］

○次世代の大中農業

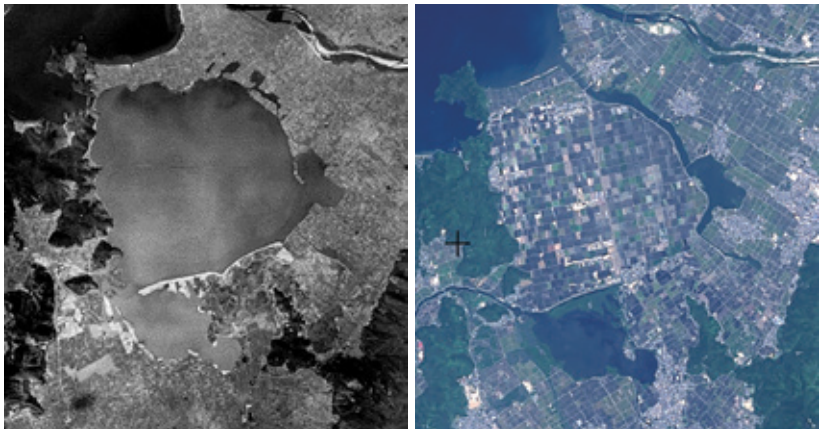
◆大中農業の新たな取り組み

大中農業王国

現在、大中干拓地は入植から50年を経過し、当時の入植者の2世、3世が中心となって、大中の農業を牽引しています。「大中農業王国」のキャッチフレーズのもとで、明るい未来を描きながら、稲作、ハウス野菜や肉牛、花卉の複合経営を続けており、まさに県内屈指の活力ある農業地帯となっています。

これからの大中

一方、設置から50年を経た排水ポンプが故障し、大雨の際の排水に支障が出るなど、施設の維持管理、更新などが課題となっています。平成27年より応急対策として、ポンプの更新、施設の耐震化、大幹線排水路の改修などに取り組んでいます。先人たちの歩んできた開拓の歴史を次世代の明るい未来に引き継ぐ上では、大中に限らず、県内各地の干拓地で、用排水施設の老朽化対策が必要とされています。



▲大中の湖干拓前後の航空写真［提供：国土地理院 空中写真］

開拓者の手記（※『大中の湖入植 30 年の軌跡』より引用）

～北部集落 30 年のあゆみ　入植初年度～

北部集落区長　田井中　昭

比叡下しの寒風身をさす2月、我々北部入植者72名は、新農村建設、近代化農業経営者として、志望多数の中から選ばれた配分通知書を手にして、9つのグループを造り、足を踏み入れた。

配分された土地は雑草が生い茂り、その下にはあらゆる草種子が箒木で掃きたいほど散在していた。吾々は先づ各協業体ごとにこの雑草の除去に全力を挙げた。四粁四方の大中の湖に、連日大工場地帯かと思われる様な黒煙が舞い上がる。雑草を除去した後の圃場は、吾々の想像したような土地ではなかった。腰までつかるような沼地、やせ枯れた砂地、工事用残土の堆積した土地、各協業体ごとに耕作できる面積は種々まちまちであった。

何回も話し合って面積の均一を試みた。

排水を掘る組、一輪車やそりで地均する協業体、県の指導する持ち込み道具では本年作付けは無理と見て、ブルドーザを借り入れ、地均する組、多種多様であった。負けず、おくれず、懸命の毎日が続いた。

大圃場に野小屋が点在、此れを寄り所としてここに集まり綿密な計画を立てた。

大型トラックがほしい。雑草防除に動噴がほしい。但し県の本年度営農計画では認められない。誰かが言いました。「此の大圃場で、テーラーで耕作するのは無理ではないか」

みんなの意見が一致し、多少勇み足では有ったが、各組とも大型トラクターを導入した。大中の湖干拓地にトラクターのエンジンの音が勇ましく響き次々に耕転されていく。手植え、乾田直播と、それぞれ県の指導と計画に基づき着々と進められていった。

作付けは一応終わったが、ほっとするまもなく、次々に生える雑草に莫大なる除草剤と連日にわたる重労働との戦いが始まった。

スタム乳剤による除草が2回、3回、4回、と繰り返され、不眠、不休、の努力の積み重ねにより大圃場には青田の波が打つようになった。

入植当時より覚悟の上とは言うものの、半年間連日連夜の重労働による肉体的疲労、多少蓄えてきた貯金　百弐拾万円の持ち込み資金の納入、半年間一銭の農外収入のない家計のやりくり、始めて行った共同作業による精神的な負担等が重なり合い、入植当時の意気込んだ顔が、次第に暗くなって来た。

今、負けてはならない。吾々には新しい村づくりと言う使命と責任がある。お互いに助け合った。力づけ合った。慰め合った。みんな一生懸命努力した。

10月には待望の共同農舎の完成を見るに至り、これを拠点として再出発することにした。まもなく秋の収穫作業が始まった。

然し本年度は背後地収穫作業と重なったため、連続重労働の作業が続いた。

昼間刈り取った稲はその日の内に脱穀し、夜間作業は乾燥機の操作に始まり、深夜の籾すり。人も機械も、疲労の限界に来た。

全身に湧く何糞の気持ちのみで支えられる毎日が続いた。

幸い本年は、天候に恵まれ、県の適切な指導と入植者全員の血のにじむ様な努力と忍耐とにより、北部集落で1万6千俵余りの産米を出荷し、当初我々の予想もしなかった決算が出来たことは本当に涙が出るほどうれしかった。

此の1年間は、吾々の生涯忘れることの出来ない年であろう。

▲入植地での田植え（小中の湖干拓地）[『能登川の歴史』より転載]

～30年の思い出　入植当初の想いで～

田井中　信一

昭和41年2月

干陸された広野は雑草と雑木の生え茂る大地。この大中の湖に一匹狼での想いで第一歩を踏みしめた。先ず第一に、この荒野を1日も早く農作物を作付けるか。第2協業体男女全員の協議が数日続いた。先ず火災放射器を数台買い入れて、背丈以上もある雑草を焼き払い、又、手作業で柳の大木を伐採する等数ヶ月も続いた。又キャタピラのトラクターと耕運機数台を購入した。

男子は耕起に女子は雑草等の後始末に取りかかるが、何分にも道路も排水もない、又ぬかるみがあれば残土が積まれた山あり、海がある。

トラクター等のエンジンの音は聞こえるが姿は見えない。

こうした現状で農作業は一向に進まない。1日の内に何10回と沈むトラクター、耕運機も胸までつかる泥沼の中、作業は実に悪戦苦闘だ。

こうした中で、手植え用の育苗作業の準備も並大抵でない、約3分の1の農地はとても作付け出来る現状ではない。遂に（直藩）でしのいだ。

30年の歳月が過ぎた今でも胸までつかる、あの田植え、朝な夕なに夜星をいただいての稲刈りや籾すり等々。夜食に食べたラーメンのあの味は格別で苦闘を共にした、同僚は一生涯忘れることは出来ない想いです。

現在の美田は何と言っても協業作業と団結心の魂の宝物だ。

幸いに大した災害にも合わず、順調に進んだ背景には国、県等の御支援の賜で、こうした四苦八苦の苦労の思い出話をせずに、他界された方々を思い浮かべる時、我々は幸せ者だったと感謝の日暮らしも忘れられない。

白髪を頂き、足腰の痛むのをいたわりながらの今日も、たとえ一握りの土たりとも粗末に出来ない昨今ではないでしょうか。

▲大中の湖干拓地入植式［提供：滋賀県］

▲入植者団地（西部集落）［農業農村整備情報総合センターホームページ『水土の礎』より転載］

（参考）

農林水産省近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所編 (1983)『淀川農業水利史』p.269-274, 農業土木学会

滋賀県史編さん委員会編 (1976)『滋賀県史 昭和編 第 3 巻農林編』p.197-200, 滋賀県

滋賀県中学校教育研究会社会科部会編 (2005)『12 歳から学ぶ滋賀県の歴史』p.165,179, 木村至宏監修 , サンライズ出版

一般社団法人農業農村整備情報総合センター（発行年不明）「琵琶湖干拓建設事業 大中の湖地区」
<http://suido-ishizue.jp/kokuei/kinki/F1/F2/Shiga_Dainakanoko.html> 2017 年 3 月 1 日アクセス

「国営施設応急対策事業「大中の湖地区」の概要」,
<http://www.maff.go.jp/kinki/press/seibi/suiriseibi/pdf/151014-01.pdf> 2017 年 3 月 1 日アクセス